

# 生態場における生態学的意味の生成

## —第三段階：意志の形成段階における生成—

岡崎 敏 雄

キーワード：言語生態学、意味論、生態学的意味、言語生態場、生態場

### 1. はじめに

言語の意味はア・プリオリに存在しない。また、言語の中に、あるいは言語の形と意味の相互間のみの関係の中に閉じ込められ、静態をなすものとして存在しない。意味は、言語、人間、自然の三生態間の相互交渉的動態を形作る生態場をなして生成され、変容するものとして存在する。言語生態学における意味の捉え方の基軸はこの一点にある。典型的には、言語を、生きること、つまり自然生態との相互交渉の下にある人間生態と結びつけて捉える時はじめて意味が成立する。では、意味は如何なる具体的過程・構造によって成立し、生成されていくか。本論はこれを生態学的意味の生成の過程・構造の問題として捉え、そのうち、第一、第二段階の生成論（岡崎 2009a）を踏まえ、第三段階の生成に焦点を絞って論ずる。

### 2. 意味の生態学的生成 ecological genesis of meaning

生態学的意味は、以下のように規定される生態場の中に、実践生態場が生成されるに至る過程で、段階的各相を経て生成される。

#### 2.1 生態場

##### 2.1.1 現実生態場・意識生態場

生態学は、個々の人間即ち各自己が生き、人間生態を形づくっている今、この場を現実生態場として捉える（岡崎 2009a）。現実生態場とは、人間が自分もその一部を成し、その上で直面している社会、及び自然の形作る現実世界の現相である。一方、現実世界を構成する人間の意識内に形づけられるのが意識生態場である。

##### 2.1.2 認識生態場・言語生態場

「現実世界は如何なる状況にあるものであるか」の問いをきっかけとし、「そこでどの

ように生きるべきか」の問いに突き動かされつつ形づくられていく「現実世界の能動的認識」の過程が、この意識生態場の中に、認識生態場として形成されていく。

### 2.1.3 外的言語生態場・内的言語生態場

以上を大きく把えると、まずは個々の人間が生き、その下に置かれている二つの生態場、一方の現実世界に対応する現実生態場、他方の個人の意識内世界に対応する意識生態場の両者がある。一方で、現実生態場にあつて、個々の人間の認識生態場で形成される内容を、相互にやりとりすることによって、現実生態場での人間諸活動を円滑、かつ効率的に進めることを目指す言語活動によって形づくられるのが外的言語生態場である。他方、以上のマクロな構図を捉えた上で、言語生態場として、現実生態場の中に形づくられる外的言語生態場の他に、意識生態場に形作られた認識生態場の中に内的言語生態場が形成される。

外的言語生態場は、現実生態場の下にある人と人との間の外的やりとり、即ち社会的相互作用をなすやりとりが生み出す生態場である。これに対して、内的言語生態場は、意識生態場の中で、典型的には自問自答のような自己内対話の形で、人が認識内で行なうやり取りが生み出す生態場である。この際、意識生態場の中で形づくられる「世界（即ち社会及び自然）の能動的認識」の「認識（即ち、社会及び自然に関する認識）」は、言語を媒介としてなされる。但し、ここでの「言語」は、上記の外的言語生態場で、人と人との間で現実の発話の形または文字の形でやり取りされる言語（これを外的言語と呼ぶ）とは異なる。外の現実の中ではなく、人の意識の中における「言語」である。その意味で内的言語と名づけられるものである。

このように言語生態場には、一方で現実生態場の中に形づくられる外的言語生態場と、他方の意識生態場の中に形づくられる内的言語生態場の二つがある。

### 2.1.4 実践生態場の生成

以上の生態場は次の三段階を辿る中で、新たに実践生態場が生成される。即ち、第一段階として、認識生態場において現実世界の能動的認識の過程が形成される。その能動的認識過程の端緒の契機は、所与、自発、直接的・間接的あるいは意識的・無意識的など多様な実践である。第二段階として、その認識に基づいた上での現実世界に対する実践が形作られ、認識内容を実現する現実相が獲得される。さらに、第三段階として、再度しかし新たに第一、第二段階の循環的蓄積を辿る中で、「過去の生態場」から送り込まれてきた結果その個人が直面して生きている「今、ここの現実生態場」を超えて、次の「今、ここ」即ち「未来の生態場」を、どのようにして形作るか、の具体像が形成される段階に至るとき、その個人にとってその現実生態場は、それ以前の現実生態場とは異なる性格を新たに付与された生態場、実践生態場として存在し始めるものとして捉えられる。

### 2.1.5 実践生態場に至る過程における意味の生成と変容—言語の意味はア・プリオリに存在しない—

この実践生態場の生成に至る各段階で注目すべき点は、その各段階で併行して、第一に、世界の能動的認識、第二に、他の個人との間におけるその認識の交換の形で形作られる自己内外の対話及びそれをなす内的言語、外的言語がそれらの現実相を獲得する実践、第三に、最終段階の実践生態場の各形成過程固有の様相で、言語のもつ意味が生成され、段階をおって変容していくという点である。

即ち、言語主体の生き方（人間生態）が、実践生態場の生成に至る各段階に対応して新たなものとして形作られるのに伴い、その言語主体の言語のもつ意味のあり方も各段階に応じた変容を遂げていく。言語主体の新たな生き方即ち自然生態との相互交渉の下にある新たな人間生態に応じた新たな意味のあり方、即ち言語生態が、生き方を形作る認識、実践、現実世界（＝現実生態場）下の諸関係総体の中に織り込まれて、新たな生態学的関係の中に形作られる意味の生成として段階的に変容を遂げていくのである。これが生態学的意味の生成である。

### 2.1.6 実践生態場の生成・生態学的意味の生成と、自然生態・人間生態・言語生態各ステージの相互交渉的展開

この前提となるのは、言語の意味はア・プリオリに存在しないという点である。言語は人の生き方、即ち、自然生態との相互交渉の下にある人間生態との関わりなしにその意味が成立しない、という生態学における言語の意味に関する見方である。即ち、（自然生態との相互交渉の下にある）人の生き方と結び付けられることではじめて言語の意味は生成される、という見方である。

以上の生態場の鳥瞰図は、言語生態、人間生態、自然生態が相互に緊密な関係を形づくっている構造を鮮明に示している。即ち、現実生態場と意識生態場が合わせて形成する自然、人間両生態全体の中に、言語生態は、外的、内的言語生態場の中に形成されるものとして位置づけられ、全体として、生態場をなしているのである。この生態場に新たに実践生態場が生成されることで、生態場全体即ち、自然、人間両生態全体とその中に位置づけられる言語生態は、新たなステージに移行する。即ち、実践生態場の生成に伴い、生態学的意味が生成されていく。その下で、自然、人間両生態、言語生態は新たなステージへと展開していく。この各ステージは同時に、言語の形骸化、融解（岡崎2009a、b）の保全の形成されていく自然、人間両生態、言語生態のステージの展開である。

このように、実践生態場の生成・生態学的意味の生成と、自然生態・人間生態・言語生態及びその保全の各ステージは、相互交渉的に展開されていくものとしてある。

## 2.2 「生態場が実践生態場として生成されるに至る過程」のなかで生態学的意味が生成される三つの段階

生態場が実践生態場として生成されるに至る過程の中で、次の三つの段階に渡って生態学的意味が生成される。

### 2.2.1 第一・第二の段階における生成—「現実世界の能動的認識過程を通じた概念ネットワーク新生」の段階、「認識・言語に基づく実践の現実相獲得」の段階—

認識生態場における現実世界の能動的認識過程を通じて、言語の生態的内的生態環境である（「世界」、「生き方」に関する）概念のネットワークが新たなものとして創り出される。その場合、個々の事象及びその概念（内的言語）が言語主体の生きることと結びつけて扱えられることを通して意味が成立する。これが生態学的意味の生成の第一段階、認識による意味生成、である（注1）。

次に、「概念のネットワーク」を形づくる各概念が、一方で自己内対話などを通して内的言語として機能し、他方他者との間で、外的言語として表現され、また、対話相手の外的言語化された概念が理解される中で、つきあわされ、さらに実践を通じて、認識内容を実現する現実相が獲得され、それによって文字どおり自己の実践という形での自己の生き方とのつながりが形成されていく。これが認識・言語に基づく実践という現実相獲得にいたることを通して、諸事象とそれに対応する概念の意味が成立する過程における生態学的意味の生成である。即ち、生態学的意味の生成の第二段階、実践による意味生成である（注2）。

### 2.2.2 第三段階における生成—「今の生態場」を起点とする「過去・未来の生態場」の結像に基づく意志による生成段階 / 実存による生成段階—

第一、第二段階を通じて、概念のネットワークは、「現実世界（＝人間生態系、より正確には、自然生態系と、その一部をなしているものとしての人間生態系）は如何なる状況にあるものであるか」の問いを端緒として、以下「そこでどのように生きるべきか」の問いに突き動かされつつ、さらに「この世界で生きていくために確保されるべき生態学的条件は何か」、「それはどのようにして確保されるか」、その確保のために「何がなされるべきか」、「どのように」等の問いを媒介とする世界の能動的認識、及び上述の現実相獲得を辿る。その過程が本論の後半で見るような経緯によって、「自分、人が生き、直面している今、この生態場」に先立つ「過去の生態場」及びそこから送り込まれてくるありようがどのようなものであり、それに対して「今、この生態場」はどのようなものであるか、あるいは、どのようにしてそこから形作られてきたか、さらにどのようにして「未来の生態場」を形作っていくか、の一連の「生態学的問い」を起点とする〈問い—答える〉の過程に至る時、「今の生態場」が「未来の生態場」の具体像に変えられるべき能動的対象として扱えられることにより、自己の生きることの諸相に結びつけられる。この結果、方向性を以て生きる意志、及び意志に基礎付けられた実存が形成さ

れ、事象、その概念のネットワークは人間主体がその意志を持って、さらにその意志によって基礎づけられて生きる視座から位置づけられた意味の生態系をなすものとして新たに生成されていく。このような過程が生態学的意味の生成の第三段階、意志による意味生成、実存による意味生成である（注3）。

以上を通じて、概念のネットワークは「生きるための概念のネットワーク（＝生きるためのスキーマ）」として、またそれに基づき、言語の意味が「生きるための意味」即ち生態学的意味の結節点をなす一まとまりの最終段階の相を以って生成される。

### 3. 取り上げる言語生態資料

本稿で取り上げる言語生態資料は、アフガニスタンに農業支援で訪れ2008年8月26日の事件で亡くなった伊藤和也さんとともに、農業支援にあたっていた進藤陽一郎、山口敦史、高橋修の三氏が共同執筆したペシャワール会報 No.95 2008年4月1日発行「2007年度・農業計画報告 風土、嗜好の制約に逆らわず一悪戦苦闘のお茶、いよいよ製茶段階へ」（5ページのみ）及び、No.96 2008年6月25日「2007年度農業計画報告 地域に広がり始めた試験農場の成果」（14ページから15ページ）の一部である。

筆頭執筆者である伊藤和也さんについては、伊藤さんが参加していた日本のNGO「ペシャワール会」（本部・福岡市）に志望した際の「志望動機」が、事件の二日後に同会事務局より発表されている。それによると、伊藤さんは「私がワーカーを志望した動機は、アフガニスタンに行き、私ができることをやりたい、そう思ったからです。私が、アフガニスタンという国を知ったのは、2001年の9・11同時多発テロに対するアメリカの報復爆撃によってです。」としている。また志望するにあたって、自分自身、及びアフガニスタンについて次のように述べている。「私の現在の力量を判断すると、語学は、はっきりいってダメです。農業の分野に関しても、経験・知識ともに不足していることが否定できません。ただ私は、現地の人たちと一緒に成長していきたいと考えています。」としている。さらにその先に「私が目指していること、アフガニスタンを本来あるべき緑豊かな国に、戻すことをお手伝いしたいということです。これは2年3年で出来ることはありません。子どもたちが将来、食料のことで困ることのない環境に少しでも近づけることができるよう、力になればと考えています。」と述べている。2007年農業計画報告書は2008年6月25日づけのものであるが、その2ヵ月後の2008年8月26日に伊藤さんは事件に巻き込まれている。

### 4. アフガン言語生態資料における生態学的意味の生成—第三段階の生成—

#### 4.1 現実生態場・意識生態場における認識・言語・実践の生成過程

まず、巻末のページの図1に即して見ていく。ここに現実生態場と意識生態場における認識・言語・実践の生成過程、即ち、次節4.2で述べる生態学的意味の第一、第二

段階の生成の背景をなす過程が展開されている。

伊藤・進藤・山口・高橋をはじめとするアフガニスタンにおける農業支援の担当者たちは（以下代表して伊藤さんの名前で述べる）、さつまいもの栽培に関して、一年目の失敗に続き、二年目では次のような状況に遭遇した。

二年目・三年目の冬は種芋貯蔵のトラブルです。種芋は地面に掘った縦穴に保存していますが、「おい、寒いだろう」と手をかけ過ぎたために縦穴内の温度が高くなって腐敗・発芽を起こしました。逆に「蒸せるだろう」と風通しをよくし過ぎて低温になったためにたくさん腐り芋が出ました。（ペンシャワール会報 No.95, P5）

これが、図 1 の中の一番右の列、〈現実生態場〉で（T1）の時点において発生した事態である。本図 1 で横長の楕円は、円で囲んだ主、つまり主体（ここでは伊藤さん以下の 4 人及び農業支援チームの人達）が、客体、つまり現地アフガンの自然に対して働きかけ、成果（成果とは言え、いろいろな問題が発生した成果）を受けた現実生態場の様子を示すものである。ここで左右、上下及び斜めの矢印は主体から客体に対する働きかけ、つまりさつまいもの栽培という生産の活動によるアフガン現地の客体に対する働きかけや、主体 1 と主体 2 の間の互いの働きかけを示す。また主体から客体への働きかけの結果、その客体からの反応は例えば種芋がいずれも腐敗するという結果などの反応として返ってきた様相を逆向きの矢印が示す。

この冒頭（T1）の実践が現実生態場で行われたのを踏まえて、その左の列である〈意識生態場〉で、（代表して）伊藤さんという主体の意識の中に（T2）の時点で、この現実生態場で起きた出来事をどのように認識するかに関わる認識が、\* 3-1 「アフガンの冬の種芋保存に関して、保存する穴の中が高温である場合も、また通風しがよ過ぎる場合も、共に腐敗を引き起こす」の形で生まれている。〈意識生態場〉で形作られた〔認識生態場〕の中である。即ち主体である伊藤さんが客体であるアフガン現地に対して得た認識である。（注：図 1-図 3 中、上の〈現実生態場〉〈意識生態場〉〈現実生態場〉のうち真ん中の〈意識生態場〉の列についてのみ、主体を示す「主」の周りの円及び客体を表す「客」のまわりの円の外にアポストロフィーがついている。このアポストロフィーは、円内の主、客が現実生態場で行った事柄について、その主体の意識生態場の中に形作られた認識であることを示すために付けられている。（因みに、〈現実生態場〉の楕円の中の「主」、「客」の場合にはアポストロフィーは付いていない。）

このような認識を踏まえて、さらに（T3）の時点では、伊藤さんという主体 1 の意識生態場の中の認識生態場で、自問自答が行われたと考えられる。即ちペンシャワール会報 No.96 が次のように述べている。

種芋保存に関しては、麦藁やトウモロコシの茎などで縦穴を覆って保温するという簡素な方法で九割以上の種芋を保存することができ、ようやく温度管理の目途がつか

きました…。(同上会報 No.96. p.15 「サツマイモを腹いっぱい食べてもらえるように」)

この自問自答で、「種芋 (の) 適温をどう確保するか」という自問\*3-2が投げかけられたのに対して、意識生態場の中で、同様に\*3-3「麦藁で保温してみてはどうか」と自答がなされたと考えられる。

このような (T2) (T3) の二段階の時期における認識を踏まえて、図1の一番左の列、[言語生態場] の (T4) の時期において、横長の長方形内に\*4のやり取りがなされる。主体1である伊藤さんと主体2の試験農場のアフガン人の担当農家の人の間のやりとりである。つまり\*3-1, 3-2の認識を外言言語に表したことによって交換される\*4の相談がなされる。ここで、〈現実生態場〉に、主体の外に現れた言語のやりとりの場である[言語生態場]が生成してくるのである。それは、先ほど (T2) (T3) の時点で、〈意識生態場〉の中の認識生態場でなされた自問自答として、内的言語生態場が生成されたのとは対照的に、頭の内ではなく、外での人と人との間のやりとりの場における言語生態場即ち外的言語生態場の生成である。

以上のような経緯が先行したあと、(T5) では、種芋の腐敗防止策である麦藁やトウモロコシの茎などで縦穴を覆って保温するという方法で芋の生産がなされ、その結果種芋が生育し、収穫されたという成果が得られたことが「芋の上にも三年」に次のように示されている。一年目の失敗、二、三年目のトラブルの後やっと達成された成果である。

四年目に当たる昨年は、数々の失敗を教訓として種芋の保存も苗床への伏せ込みも、また栽培技術もおおよそ勘所をつかんで成功し… (No.95. p.5)

この際、このような\*5の生産や\*6の成果にあたって注目すべき点は、伊藤さん達農業支援者と現地のアフガン人担当農家の人との間に、協働\*7がなされていることである。

図1 (T5) で展開したこのような過程を示すのが右端の列〈現実生態場〉中の正方形の内部のT5である。それは三つの楕円がくみあわさって示されている。このうち、第一の左上から右下にかけて描かれた楕円の中で、種芋の腐敗防止策の実施という生産とその成果を示すのが、一つは主1 (伊藤さん以下、即ち農業支援員である伊藤さんを代表とする人)と現地での自然である客体1との間の往復の過程を示す左上から右下にかけて描かれた楕円の主1から客1に向けた矢印のもとにある\*5である。これに対して、同じ楕円の中の、アフガンの現地の自然である客体1から主体1に向けた矢印のもとにある\*6は、種芋の生育と収穫という成果である。三つの楕円のうち\*2の楕円、つまり主体2 (現地の試験農場のアフガン人担当農家の人達)と現地アフガンの自然客体1との間の過程が左下主2から右の客1にかけて描かれた右上がりの楕円の

過程でも、同じように、\*5と\*6の往復の過程がそこには成立している。そこには、この二つの右下がりと右上がりの楕円は人間である主体1、主体2とアフガン現地の自然との間になされた「自然との相互作用」が示されている。

三つ目の楕円である縦長の楕円の中では、伊藤さん達主体1と試験農場のアフガン人担当農家の人達である主体2との間の協働\*7の過程が示されている。先ほどの主体と自然との間の過程が自然との相互作用であったのに対して、こちらは人間の間の「社会的相互作用」を示すものである。こうして、T5では、主1－客1間・主2－客1間の「自然との相互作用」が、主1－主2間の「社会的相互作用」を仲立ちとしてなされている。

#### 4.2 生態学的意味の生成：第一、第二段階の生成

上における伊藤さん達農業支援員の働きかけをきっかけとする、実践、認識、言語、さらにまた実践というT1からT5に示された過程は、同時に生態学的意味の生成の第一、第二段階が次のような形で成立していった過程である。(T1)の実践(さつまいもの栽培、その失敗)を契機として、主体に(T2)の認識(\*3－1)「アフガンの冬の種芋保存、保存穴の高湿、通風ともに腐敗する」が生まれる。こうしてアフガンという現実生態場での直接的実践を契機として、アフガンという世界の能動的認識が得られ、アフガンの冬、種芋保存、保存穴の高湿、風通、腐敗するなどの諸概念が、実践という生きることと結び付けて扱えられることを通して意味が成立する。これが生態学的意味の生成の第一段階である。

その上でさらに、このT1からT4を踏まえた、(T5)の現実生態場では、\*5種芋腐敗防止策を実施して生産がなされ、その成果として\*6種芋の生育と収穫が果たされる。それが\*7の協働としての伊藤さん達と担当農家のアフガンの人との間の社会的相互作用を媒介としてなされる。こうしてT1からT4及びそれを踏まえたT5は認識、言語に基づく実践という現実相の獲得をなし、これによって言語は、あるいはそれによって形作られる情報は、「生きるための言語」「生きるための情報」となる。生態学的意味の第二段階の生成である。自然との相互作用と、社会的相互作用を円滑につなぐものとして言語が機能するwellbeingの下でその意味が生成されていると言える。

#### 4.3 第二段階の生成の新たな局面ー共同体の形成に伴う新たな意味の生成ー

さらに、生態学的意味の第二段階目の生成は、共同体形成という新たな局面で進展する。以下、図2に即して見ていく。

T5に示された伊藤さんほか農業支援の担当者たち(円で囲まれた主1)と試験農場のアフガン担当の人たち(主2)の間の社会的相互作用を媒介としたアフガンの自然(円で囲まれた客1)との間の相互作用は新たに、試験農場の担当の農家の人たち(主2)と周囲のアフガンの農家の人(円で囲まれた主3)との間の社会的相互作用を媒介としたアフガンの自然との間の相互作用を創出することで更なる展開を形成する。

今後農業計画の成果を定着させるためには、(中略) その先頭をいくのはこれまで文字通り我われと共に働き共に失敗に泣き、共に成功に喜びながら経験を蓄積してきた試験農場の担当農家の方たちです。「おれ自身がこの数年間栽培試験をやってきた種だ。品質は保証する。安心してまいてくれ。」と、今や我われに代わって周りの農家に対して自信をもって指導に当たってくれる頼もしい人材に成長してくれています。(同会報 N.96 p.15)

図2の真ん中の列の中段のT6に示したように主2、試験農場のアフガン人担当農の人には、上記の発話「おれ自身がこの数年間栽培試験をやってきた種だ。品質は保証する。安心してまいてくれ。」の前提として、図2の真ん中の列[認識生態場]の横長の長方形内\*8「おれ自身がこの数年間栽培試験をやってきた種だ。品質は保証する。」という認識がなされていると見ることができる。即ち、T6の横長の楕円の中即ち主2の意識生態場の中で、主2は、同じく意識生態場の中にあるアフガンの自然(アポストロフィ付きの客2)に対して認識\*8を持ったと捉えることができる。さらに、図2の左列[言語生態場]の中のT7の楕円に示されるように、主2のアフガン人担当農の人の認識\*8は、周囲のアフガン人の農家(主3)に対して、意識の外にある(現実生態場)において、したがって外的言語によって「おれ自身がこの数年間栽培試験をやってきた種だ。品質は保証する。安心してまいてくれ。」という表現を作り出している。これがT7の楕円の下の方角の中の\*9で示されていることである。これはT7の楕円の中で、主2から主3に対して、下の矢印に沿って認識\*8が表現\*9の形で伝えられたことに示されている。

T7を踏まえて、図2の右端(現実生態場)において、T7で主2と主3でかわされた言語活動という社会的相互作用を媒介として、主2から主3に対する「自信をもって指導」が、T8の縦長の楕円の主2から主3に向う矢印\*11として行われる。これに対して、周囲のアフガン人の農の人(主3)から主2に向って指導を請うということも行われる(\*12)。こうして、主2と共に、主3が主2の勧めで、種を蒔くという\*10、即ちT8の主2から客2、主3から客2に向う斜めの二つの楕円の中で\*10として示された二つの矢印に当たる自然への関わりが形成される。それに対して、アフガンの自然(客2)の下では種の成長、収穫という形での成果が、主2や主3に向って示されるという、自然との相互作用が展開していると見ることができる。

以上のようなT5からT8の経緯を経て、図2の右端の正方形の中に示されるように、当初T5において主1と主2の間にのみ進められていた活動が、さらにT8に見られるように、主2、主3の間にまで展開され、新たな局面を形成している。ここでは、主1、主2、主3に代表されるようなアフガンの人々の間で、「共通概念、判断、認識」を伴う主体群間と、共通の客体自然間の社会的相互作用、及び自然との相互作用を蓄積する中で形成される「共同体」共通の「生きるための概念、判断、認識」が形成されていっ

ていると見ることができる。さらに、\* 9 (T7) の発話に現れ、相手に理解された言語は、「生きるための概念、判断・認識」を伴う、「共同体共通」の「生きるための意味」を持った言語となる。こうして、言語は一段と飛躍的に「共同体＝社会」と内在的に関連し、かつ一体化したものとなり、言語の well-being (生きるための意味を持って機能する言語) と、人間の well-being (生きるための概念、判断、認識を具えた社会的相互作用、自然との相互作用、それによる生存の条件の確保) は一体化したものとなる。このように、特に\* 9 の言語生態場、それに基づく\* 11、\* 12 の社会的相互作用を通じて、言語は、新たに共同体を形成し、ひいては拡大する能力や機能をもつ言語、共同体形成機能を持つ言語へと質的転換を遂げる。

この共同体は、集合的・協働的に、自然生態系との相互作用である生産の基盤を強化するものとして存在し始め、多くの人間の生存の基盤を形作ることで、その共同体における言語（及びその well-being）は、一層、人間の well-being を強化するものとされる。同時に、自然に対する相互作用を形作る社会的相互作用を共同体規模に引き上げること、言語はさらに、言語、社会、自然の相互交渉的生成を強化するものとして存在し始める。その中で、生態学的意味の生成の第二段階は、新たな局面、即ち人間主体が共通概念、判断、認識を具えた主体群間、と共通の客体自然間の社会的及び自然との相互作用を蓄積する中で形成された共同体共通の、生きるための概念、判断、認識として位置づけられた意味の生態系を形作るに至る。

#### 4.2.4 生態学的言意味の第三段階の生成一意志・実存による生成一

以上のような経過を経た時点で、2007 年度農業計画報告書総括部分において、伊藤さんほか農業支援のチームは、典型的には薩摩芋として食糧の自給が一部達成され、人材育成が現実化しつつある状況を達成する。以下図 3 に即して見ていく。

総括部分は次のように述べている。

サツマイモは同じ栽培面積で水稻の 2 倍以上の人口を養うことが可能な救荒作物としての一面を持っています。(中略) 昨年の収穫の際には実に日本人一人の一生分くらいの芋があったという間に農家たちに半ば取り合いに近い形で分配されたことです。(中略) いまや我われに代わって周りの農家に対して試験農場の担当農家たちは自信をもって指導に当たってくれる頼もしい人材に成長してきました。(ペシャワール会報 No.96 p.15)

この節は、図 3 の真ん中の縦長の枠に示された「認識生態場」の中の T5－8 の横長楕円に見られる主 1 が、意識の中で、アフガンの自然を示す客の意識内でのイメージを捉え、認識\* 14「食料一部自給、人材育成を現実化しつつある」の現在の具体像として把握したものを書き表した結果と捉えることができる。これを、2003 年日本で伊藤さんがアフガンの農業支援を「NGO ペシャワール会」に志望した動機書に記した内容

「アフガンは本来あるべき緑のない国」「子どもたちが、食糧のことで困っている国」という、図3の縦長の枠で囲まれた認識生態場のうち、T0の時点の\*1として示された（T5－8の時点から見ると）過去の具体像と対比してみることができる。これは、T0の横長の楕円の中で、主1の伊藤さんがその意識において、アフガンの自然に対して持った認識\*1に基づく像である。

このような認識\*14の現在の具体像を起点として振り返られた\*1の過去の具体像に対して、伊藤さんは（この報告書では支援チームと共同執筆で）他方2007年度農業計画報告書で、今後について次のような意志を綴っている。

昨秋には冒頭に紹介したとおり、これまでにないにぎやかな収穫祭も催すことができました。いずれにしても最後の最後に残るものは彼ら現地の農家と作物だけです。少しでも多くの成果が彼らによってアフガニスタンの将来に引き継がれることを願いながら、これからも一つひとつの積み重ねを大切にしていきます。アフガニスタンの農村をとりまく情勢はあらゆる面で厳しくなっています。しかしそれでも現地の人たちは明るく逞しく生活しています。日本でもアフガニスタンでも平和な生活を求める願いは同じです。我われはアフガニスタンの人々が安心して食べていくために投じた一石が根付くように、これからも一生懸命活動していく所存です。（ペシャワール会報No.96 p.15）

ここには、伊藤さん（及び支援チーム）の認識生態場の\*15「育成された芋と作物などの食糧、人材が引き継がれていくように一つひとつの積み重ねを大切にする（意志）」と「人々が安心して食べていくために投じた一石が根付くように一生懸命活動していく所存（意志）」が示され、T0の過去の具体像やT5－8の現在の具体像と並んで、未来に対する具体像として示されている。

これら認識生態場の中で示された認識は、図3の左の列に示される言語生態場において、それぞれペシャワール会の志望動機書の形（T0）における表現\*1として、またT5-8の2007年度の農業計画報告書として表現\*17の形で、いずれも読者に対して、外的言語生態場の下で表現し言語化されている。

と同時に、このような認識・言語活動をベースとして、右端の（T9）の現実生態場では、\*1、14、15の内容の認識を伴う、過去・現在・未来の具体像に基づく、意志、及びそれに基づく実存に沿った実践が行われようとしている。ここに、現実生態場は、それ以前の現実生態場であることをやめ、過去・現在・未来の具体像をもって形作られた意志及びそれに基づく実存に沿った実践の行われる実践生態場を生成するものとして示されている。

以上をまとめてみると、T0において自己やアフガンの人々が、望むと望まざるとにかかわらずおかれている生態場を、引き受けた上で、未来の具体像が示す「食糧が確保され、生存の基盤が形つくられ、それを可能とする作物及び人材が具えられてある生態

場」に向う「意志」、及びそれに基づく「実存」が、次の実践生態場を築いていく契機をなすものとして示されている。

その意志は、さらに、新たな「生きるための意味」の生成を可能とし、共同体共通の「生きるための意味」をもった言語を導き、共同体（社会）の well-being を可能にしていく契機をなすものとして示されている。

同時に、「生きるための意味の生成」が、「実践生態場の生成」を契機として可能とされ、その下で言語・人間・自然の生成が引き継がれている。これを歴史という点から見直すと、言語の歴史、人間の歴史、自然の歴史がアフガンの地におけるこれらの人々によって、その一こま一こまが形作られていく様相を示したものと見える。

また、これらの様相総体を通して、第二段階でなされてきた生態学的意味の生成は、「一人ひとりの人間が直面し生きている「今、ここの現実生態場」を超えて、そのような次の「今、ここ」即ち「未来の生態場」を如何に形作するのかの具体像が形成される段階に至る。その個人にとって現実生態場は、それ以前の現実生態場と異なる性格を新たに付与された生態場、即ち、実践生態場として存在し始めたものとしてある。即ち、ここでは、意志及びそれに基づく実存に基礎付けられた実践を媒介として、「今の生態場」は、「未来の生態場」の具体像にかえられるべき能動のかかわりの対象として捉えられ、この結果、方向性を持って生きる意志がそれぞれの人々に形成され、事象、その概念、そのネットワークは、人間主体が、その意志及びそれに基づく実存に支えられて生きる視座から位置づけられた意味の生態系をなすものとして新たに生成されていく段階に至ったと捉えることができる。

## 5. 結語

以上本論は、言語生態学において、言語の意味がアプリアリに存在しないこと、また意味が言語、人間、自然の三生態間の相互交渉的動態をなして生成され、変容するものとして存在すること、及びそれがいかなる過程や構造によって成立するのかについて見た。具体的には、本稿ではこれを生態学的意味の生成の過程及び構造の問題として捉え、そのうち第三段階の骨格部分に焦点を当て、具体的な言語生態資料を取りあげて考察した。骨格部分の詳細、及び人間、自然、両生態系のうち前者を中心においた本論に対して、後者自然生態系に中心をおく把握に関する考察が課題とされる。

## 注

1. より厳密に見ると、第一段階の生態学的意味の生成とは、(いわゆる認知意味論において言われる、その中核的対象である) 認知過程、「認知空間」、即ち、自然生態環境からの情報(の束)を補足し捉え返す過程、「主体の身体的な経験や主体と外部世界との相互作用に根ざす身体性に関わる要因の形作る空間」(山梨 2004) を、その前提及び端緒としながらも、その過程及び結果に基づきなお判断・推論、分析・総合、帰納・演繹・アブダクトという、(認知より一層能動的諸形態をとるという点で能動的な) 認識により形作られる理解の結果獲得される意味の生成である。従って、認知意味

論が批判的継承の対象とした、それ以前の生成意味論や生成文法に特徴的な「言語知識の自律性を前提とする理論言語学のアプローチ」、「言語外の知識から独立した形式と意味の関係からなる閉じた記号系」(山梨同上)、「主体の身体的経験や主体と外部世界との相互作用から独立した自律的な記号系の一部」(山梨同上)における意味ではない。

2. この点で、「実践による意味」は、上に触れた認知意味論、それ以前の生成意味論、生成文法における意味論の規定する範疇の「意味」には包摂され得ない意味領域、次元を成すものである。
3. 「意志による意味」、「実存による意味」もまた、注2と同様である。

## 謝辞

会報資料の使用をご快諾くださったベシャワール会に心より感謝いたします。

## 【参考文献】

- Barton, D. (1994). *Literacy: An introduction to the ecology of written language*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Haugen, E. (1972). *The ecology of language*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Haugen, E. (1985). The language of imperialism: Unity or pluralism. In N. Wolfson, & J. Manes. *Language of inequality* (pp. 3-17). Amsterdam: Mouton.
- Hornberger, N. H. (2002). Multilingual language policies and the continua of biliteracy: An ecological approach. *Language Policy*, 1, 27-51.
- Hornberger, N. H. & Skilton-Sylvester, E. (2000) Revisiting the continua of biliteracy: International and critical perspectives. *Language and Education: An International Journal*, 14(2), 96-122
- Mühlhäusler, P. (1996). *Linguistic ecology: Language change and linguistic imperialism in the Pacific region*. London: Routledge.
- 岡崎敏雄. 2009a. 「生態場における生態学的意味の生成—第一、第二段階の生成—」『筑波応用言語学研究』16, 1-14
- . 2009b. 「言語生態学と言語教育—人間の存在を支えるものとしての言語—」凡人社
- . 2009c. 「持続可能性教育としての日本語教育の学習のデザイナー—生態学的リテラシーの育成—」『筑波大学文藝・言語研究言語篇』55, 1-24
- . 2009d. 「持続可能性教育としての日本語教育—課題の克服とその具体的形態—」『筑波大学地域研究』30, 1-16
- . 2009e. 「持続可能性教育としての日本語教育の学習のデザイナー—類個の育成—」『筑波大学文藝・言語研究言語篇』56, 73-92.
- . 2009f. 「人間生態学としての言語生態学に基づく持続可能性言語教育の理論と実践」『持続可能性の内容重視日本語教育における意識分析に基づく学習のデザインの基礎的研究』1-235 平成 19-21 年度科学研究費補助権研究 課題番号 19652045 研究代表者岡崎敏雄
- . 2008a. 「持続可能性教育とその要としての言語教育のためのカリキュラム論—アクロス・カリキュラムのデザイン—」『文藝言語研究言語篇』53, 17-32. 筑波大学
- . 2008b. 「言語習得・認知科学研究成果の生態学的展開に基づく日本語教育方法論」『筑波大学地域研究』29, 129-141.
- . 2008c. 「グローバル化の下で変動する世界における言語生態学の課題—持続可能性言語教育原論—」『筑波応用言語学研究』15, 1-14.
- . 2008d. 「言語教育への生態学のアプローチ—言語生態学に基づく言語生態系の育成：中国語母語話者の場合—」『日本語文化研究』1. 363-371 精華大学
- . 2007a. 「持続可能性を追求する日本語教育—その基礎としての言語教育における生態学的ア

ブローチャー』『筑波大学地域研究』28, 67-76.

- . 2007b. 「地域社会の国際化に果たす大学の役割ーグローバルな視点とローカルな視点ー」『留学生センターシンポジウム 2006 地域社会の国際化に果たす大学の役割 報告書』5, 7-16 茨城大学・宇都宮大学留学生センター
- . 2007c. 「情報生態学原論」『筑波応用言語学研究』14, 1-14.
- . 2007d. 「外国人年少者の心理・社会的要因が日本語学習言語の習得に及ぼす影響の研究」平成 16 - 18 年度科学研究費補助金研究基礎研究 (C) 課題番号 16520312.
- . 2006a. 「言語生態学における心理・社会的両生態領域間の相互交渉的關係ー『巨視的モデル』の生態学的位置づけー」『筑波大学地域研究』26, 15-26.
- . 2006b. 「言語における心理・社会的両生態領域間の相互交渉的關係ー『巨視的モデル』の生態学的评价ー」『筑波大学地域研究』27, 15-27.
- . 2006c. 「外国人年少者日本語教育の基礎としての言語政策研究ースウェーデン言語政策の言語生態学の動態分析」城生佰太郎博士還暦記念論文集委員会編『実験音声学と一般言語学』東京堂出版、538-547.
- . 2006d. 「言語生態学の基底次元をなす学としての言語福祉学の展開ー言語・言語話者の福祉の政策の要としての言語政策の分析ー」『筑波応用言語学研究』13, 1-12.
- . 2005a 「言語生態学原論ー言語生態学の理論的体系化ー」『共生時代を生きる日本語教育』凡人社、503-554.
- . 2005b 「言語生態学に基づく言語政策研究ー言語の生体・機能・福祉と言語政策ー」『筑波応用言語研究』12, 1-4.
- 山梨正明. 2009 『ことばの認知空間』開拓社

(おかざき としお 筑波大学 人文社会科学研究科)

＜現実生態場＞  
（〔実践生態場〕）

↓

•

•

•

 $(T_5)$ 

(T<sub>3</sub>)

(T<sub>4</sub>)

\*4  
3-1、3-2、3-3 の認識の外的  
言語による交換=相談

 $(T_5)$ 

- \* 5 種芋腐敗防止策実施 (生産)
- \* 6 種芋生育・収穫 (成果)
- \* 7 協働

主2: 試験農場のアフガン人担当農家の人

— 15 —

<現実生態場>  
[言語生態場]  
《外的言語生態場》

<意識生態場>  
[認識生態場]  
《内的言語生態場》

<現実生態場>  
[実践生態場]

[自然生態系認識]  
[人間生態系認識]

[自然との相互作用]  
[社会的相互作用]

(時間の流れ)

(T<sub>5</sub>)

↓

・

・

・

・

・

(T<sub>6</sub>)

・

・

・

・

・

(T<sub>7</sub>)

・

・

・

・

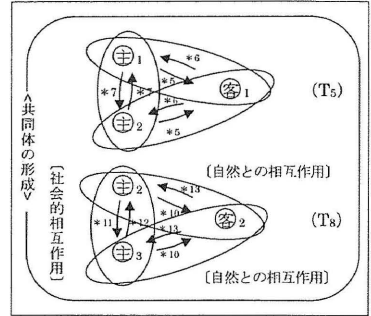
・

・

・

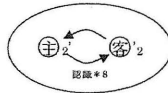
↓

(T<sub>8</sub>)



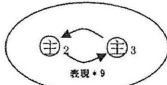
\*10 主2と共に、主3が(主2の勧めで)種を播く。  
\*11 主3が主2に指導する  
\*12 主3が主2に指導を請う  
\*13 種の成長、収穫

(T<sub>6</sub>)



\*8「俺自身がこの数年間栽培試験をやってきた種は保証できる。」

(T<sub>7</sub>)



\*9: (\*8の認識の外的言語による表現+)「安心して播いてくれ」

(T<sub>8</sub>) へ

主1: 伊藤和也  
主2: 試験農場のアフガン人担当農の人

客1: アフガンの自然(薩摩芋定着途中)  
客2: アフガンの自然(薩摩芋定着、増加中)  
主3: 周囲のアフガン人の農の人

図2

＜現実生態場＞  
 [言語生態場]  
 《外的言語生態場》

＜意識生態場＞  
 [認識生態場]  
 《内的言語生態場》

＜現実生態場＞  
 [実践生態場]

(時間の流れ)

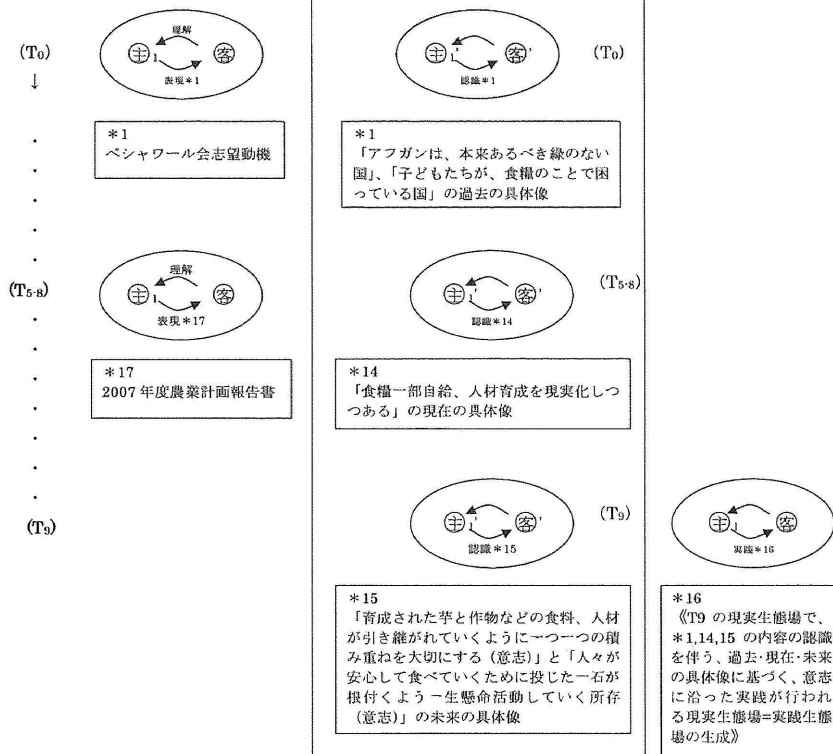


図 3